

夜気

「ほら、夕暮が眠るわ」
差し出す指も眠りに落ちゆく

「ほら、三日月が白い」
もう眠ってしまったのだね

このしじまは僕らの肩にそっと降り
少し寒いが、もうすぐ汽車は来るさ

人の世のかすかな瞬きが散らばる中
眠る時間なんて僕には邪魔だ

けれど君はお眠り、朝になれば
きっと僕らは再び^{くらし}生活が続けている

単調で、けれど温かい香りのする生活を
旅はお終いだよ、とりあえず

(1984.12.24)